

感動体験がおよぼす大きな力

— 幼児期から短大までの感動について —

和田真江¹
佐々木宏之

はじめに

感動体験についての興味深いエピソードがある。知的障害者厚生施設で童謡を聴いた利用者が涙を流して感動しているところを見た。音楽をじっくり聴いている様子で、手を叩きながら涙を流していたのである。普段あまり感情を表に出さない方だったため、この光景に驚いて施設の職員に聞いてみると、幼い頃のことを思い出して涙を流しているのではないかと語っていた。また、童謡を聴いて涙を流した後は情緒が落ち着き、自傷行為もなくなるそうである。感動体験にはとても大きな力があると感じた出来事だった。

感動体験と一言でいっても、本を読んだり、雄大な景色を見たり、映画を見たりなど様々な体験がある。特に思春期から青年期にかけての深い感動は、その後の人格形成に大きな影響を与えたり、これまでの考え方や価値観、行動を一変させたりする力がある。それでは、幼児期、児童期における感動体験は成長の過程でどのような効果をもつのか、そもそも幼児期の子どもは感動するのか、こうした疑問を抱いたことが本研究に取り組む契機となった。本研究では、感動の概念的定義や感動の効果にまつわる研究を概観し、学生を対象とするアンケート調査によって、幼児期から青年期までの感動体験がどのような影響を及ぼすのか検討する。

感動の概念的定義

感動という語の字義的な意味について、広辞苑には「深く物に感じて心を動かすこと」とある。また、感動という語には様々な感情が入り混じっていて、単一の感情として構造を捉えることはできないと言われている（戸梶, 2001）。欧米には適切な訳語がなく、日本語に特有の概念であるために、これまで感動をテーマとする研究は少なかった。感動喚起のメカニズムに関する日本国内の先行研究（戸梶, 2001）では、感動に含まれていると思

1 新潟中央短期大学学生。本論文は新潟中央短期大学平成25年度卒業論文を加筆修正したものである。

われる感情と感動に必要な条件が調査され、感動のカテゴリーに含まれる感情は、喜び、悲しみ、驚き、尊敬の順でイメージされることが見出された。そして、感動に必要な条件には「共感すること」「努力・苦勞の成就」「期待・希望が実現すること」「意外・予想外なこと」などがあり、感動の必要条件と生起する感情が対応する可能性が示唆された。このように、感動は複数の感情と密接な関係があり、複雑な構成概念であると言える。

感動の意義

ストレス対策にもっとも効くのは感動の涙を流すことだ。感動の涙には共感脳が関わっていて、共感脳を鍛えるとセロトニンの分泌が活発になり、ストレスの消えやすい脳がつくられる。よって、感動にはストレスに対する免疫力を高める力がある。このように、巷に溢れる脳科学論では関係のありそうな証拠を援用して推論を重ねることがよくあるが、これも感動が構成概念として十分なコンセンサスが得られておらず、科学的に扱うことが難しいため、そこにつけ込む隙があるからだろう。しかしだからといって、感動の効果を研究することに意義がないというわけではない。感情の高ぶりによる涙にカタルシス効果があることは実証されており (Frey & Langseth, 1985)、感情の高ぶりを感動の性質の一つと定義できるなら、確かに感動はストレス対策として有効だと言えそうだ。また、感動には思考の悪循環からの認知的転換効果があるということも指摘されている (戸梶, 2001)。

感動に関する心理学的研究

感動体験に関する横山・久保田・古田 (2011) の研究では、中学3年生を対象として学校適応感や家族機能との関連性に着目した調査が行われた。その結果、性別により感動体験の経験率が異なること、一部の感動体験では自己肯定感や学校適応感、家族機能と関連することが確認された。また、佐伯・新名・服部・三浦 (2006) は、大学生を対象とした予備調査で小学生の頃の感動体験を思い出して記述してもらい、続く児童を対象とした本調査では児童期における感動体験の構造ならびに感動体験の効果を検討した。調査の結果から、感動体験は児童期の自己効力感と自己肯定意識を高めることが明らかになっている。

以上の研究で調べられたのは、感動体験によってどのような効果もたらされるかということであった。これに対し橋本・小倉 (2002) は、どのような人が感動しやすいのかという点について検討し、他者の内面を自己に重ねて感情移入しようとする人は感動体験の頻度が高くなることを見出している。

本研究の目的

茂木（2009）によると、“自分の脳の働きを変える一番いい方法は、「感動」すること”で、“感動は、人間を変えてしまう「劇薬」”であるそうだ。しかし、感動することは本当に脳に良く、また子どもの頃の感動体験は後年の人格形成に影響を与えるような力を持つのか。その根拠となるような証拠は決して多いとは言えない。そこで本研究は、横山他（2011）や佐伯他（2006）の感動の効果に関する心理学的研究を参考にしながら、幼児期から青年期の感動体験が現在の性格特性にどのような影響をもたらすのか検討する。本研究では、感動体験と関連する性格特性として、ストレス対処と達成動機に注目した。調査1では、学生に感動体験の詳細について報告を求め、その結果得られた様々な感動体験エピソードを内容別に分類した。調査2では、幼児期から青年期の感動体験を時期に分けて記述するよう求めた。調査3では、ここまでの調査結果を基に、ストレス対処と達成動機に対する感動体験の影響を調査した。

調査1 感動体験のエピソード

感動は、喜び・悲しみ・驚きなど様々な感情が入り混じった定義の難しい概念であるが、本研究の調査対象となる幼児教育科学生の考える感動はどのようなものなのか、本研究の方向性を導き出すことをねらいとして、幼児教育科学生にとっての感動体験エピソードを収集した。

調査対象

新潟中央短期大学1年生82名が調査に参加した。調査は授業時間を利用して実施された。調査への参加は任意で、無記名で行われた。

アンケート内容

第一の設問は「これまでの人生でもっとも感動した出来事を教えてください。どのようなところに感動したのか詳しく説明してください」というもので、第二の設問は「これまででもっとも感動した映画、テレビ番組を教えてください。それはどのような内容で、どのようなところに感動したのか詳しく説明してください」というものだった。以上二つの設問について、自由記述式の回答を求めるアンケート調査を実施した。

結果と考察

感動という概念の構造把握を助けるため、学生の感動体験エピソードを類似性や共通性に基づいてグループ化した。その結果、感動体験エピソードは次の6つに分類された。

1) 達成・努力の感動（7人）

受験で合格したときや、免許が取れたときなど。

2) 部活での感動 (24人)

部活の最後の大会のことや、大きな大会で良い結果を出せたことなど。また、友達が頑張る姿を見て感動したという回答も多かった。達成・努力の感動と同じ分類にすることもできたが、数量的に部活での感動体験が多かったので独立するカテゴリーとした。

3) 驚きの感動 (14人)

誕生日のサプライズや偶然好きな芸能人に会えたことなど。

4) 風景・光景からの感動 (15人)

花火、好きなアーティストのライブ、海を見ての感動やプラネタリウムを見てなど、身近な感動体験が多く報告された。

5) 出会いと別れの感動 (12人)

弟が生まれたときや卒業式など。

6) 身近な幸せの感動 (3人)

自分のために友達が本気で怒ってくれたとき、犬のしつけができたことなど。

今回の調査で示されたカテゴリーは、戸梶 (2001) の「努力・苦勞の成就」、「意外・予想外なこと」、「今までにない経験」や、橋本・小倉 (2002) の「絆や大切なものへの感動」、「自然・芸術・技術への感動」と重なるところがある。また、涙を流すほどの大きな感情の動きだけでなく、身近で素朴な出来事や嬉しい出来事に感動を見出す意見があった点も興味深い。

学生の回答から得られた感動体験エピソードは多様性に富み、人それぞれの感動体験を垣間見ることができた。涙を流す感動体験、身近で素朴な感動体験、そして特に多かった回答は、部活などでの達成による感動体験であった。数年前の記憶であるにも関わらず具体的に詳細な記述もあり、強く感情が動いた体験は記憶に残りやすいという機能的な意義の中にも感動の役割を見出すことができるだろう。

感動したテレビ番組や映画についての回答には、悲しみの場面がありつつ様々なことを乗り越えて最後は主人公の前向きな気持ちで終わるストーリーが多かった(「海猿」など)。また、恋愛に関する映画(「恋空」など)や動物に関する映画(「マリと子犬の物語」など)が多く、感情移入しやすいものに感動したという声が多かった。したがって幼児教育科の学生は、辛いことや悲しいことを乗り越えたその先の喜びや、主人公の気持ちの変化と成長に共感して感動することが多いと言えよう。

調査2 成長時期ごとの感動体験について

調査2では、幼児期から現在までの各時期について、広範な内容を含む感動エピソード

を収集することを目的とした。調査の結果から各時期に典型的な感動体験をリストアップし、感動体験の影響を検討する調査3の基礎資料を得る。

調査対象

新潟中央短期大学2年生72名が調査に参加した。調査は授業時間を利用して実施された。調査への参加は任意で、無記名で行われた。

アンケート内容

「これまでの人生を振り返って感動した経験を思い出せる限り多く書いてください。幼児期、小学生、中学生、高校生、短大生と時期を分け、箇条書きで書いてください」という設問を提示した。

結果と考察

各時期の感動体験の内容と回答者数を表1に示す。幼児期の感動を覚えている学生は少なかったが、少ない中でも初めて自転車に乗ることができたという回答が複数あった。発表会などで先生に褒めてもらって嬉しかったという回答もあり、これは自尊感情を発達させる幼児期の情緒発達を反映したものだと言えよう。このように、幼児期の感動体験には喜びや驚きが多く、幼児期の感動体験として想起されるのは快感情を伴う出来事に偏ることが明らかとなった。小学生でも幼児期と同様に驚きや喜びの感動が多いが、この時期になると親しい人との別れに情緒的反応を示すようになり、感動体験として記憶されるようになる。また、幼児期では見られなかったテレビ・映画を観ての感動もあり、この頃からテレビ・映画の登場人物の気持ちに共感したり、感情移入したりするようになる。中学・高校での感動体験は学校行事や部活動での出来事が多く、クラスメイト・部活仲間と協力して取り組み、成功したという達成・努力の感動が印象に残っている人が多い。その一方で、人との関わりや出会い・別れによって感情が強く動かされる時期であることも示唆された。最後に、短大での感動体験は、半年間かけて準備した学校行事（中央短大ミュージカル）の感動について回答した人が多かった。長期間かけて同級生皆で作上げたものであり、言葉にならない様々な感情が溢れた出来事を、感動した体験として最初に挙げるのは当然と言えるだろう。

表1 時期ごとの感動体験

<p>【幼児期】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・初めて自転車にのることができた（6人） ・卒園式（4人） ・遊戯会など発表会をやり遂げたとき（3人） ・妹、弟、ペットの誕生（3人） ・遊園地に行った（ディズニーランドなど）（2人） ・はじめて自分の名前が書けたとき（1人） ・保育園にサンタクロースが来た（1人） <p>【小学生】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・卒業式で（10人） ・運動会や大会で（6人） ・離任式でお世話になった先生が離任した（3人） ・テレビ、映画を見て（3人） ・遊園地に行った（ディズニーランドなど）（2人） ・友達との別れ（引っ越しなど）（2人） ・サンタさんから欲しかったプレゼントをもらった（1人） ・山登りをした（1人） ・本を読んで（1人） ・オーケストラの演奏をきいて（1人） ・結婚式に行ったとき（1人） <p>【中学生】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・部活で結果を出した（21人） ・映画、テレビを見て（17人） ・卒業式で（16人） ・部活の引退、最後の大会（8人） ・志望校に合格した（8人） ・合唱コンクールなどをクラスが一体となって成功させた（7人） ・体育祭で（6人） ・本を読んで（6人） ・修学旅行で（3人） ・遊園地に行った（ディズニーランドなど）（2人） ・きれいな景色を見て（2人） ・友達からもらった手紙を読んで（1人） 	<p>【高校生】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・映画、ドラマを見て（17人） ・部活引退（17人） ・卒業式で（12人） ・体育祭で（10人） ・受験に合格（5人） ・誕生日サプライズをされて（4人） ・修学旅行で（4人） ・好きなアーティストに会った（ライブなど）（3人） ・合唱や吹奏楽の演奏をきいて（2人） ・免許を所得したこと（2人） ・尊敬できる人に出会った（1人） <p>【短大生】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ミュージカルが成功した（46人） ・テレビ、映画を見て（18人） ・実習最終日や実習中、子どもや先生から言われた言葉（12人） ・サプライズなど予想外のことが起こったとき（5人） ・ライブに行って（3人） ・遊園地に行った（3人） ・授業でのVTR（3人） ・夕日、夜景など景色をみて（2人） ・外国人と英語で話せたとき、伝わったとき（2人） ・先生の体験談をきいて（1人）
--	---

調査3 感動体験がストレス対処と達成動機に及ぼす影響

過去の感動体験が現在の自分にどのように影響しているのか、先行研究では自己意識に関わる性格特性に感動体験の影響が見出されている（佐伯他, 2006; 横山他, 2011）。本研究ではストレス反応の個人差と動機づけの個人差に着目し、感動体験との関連を検討する。先述の通り、感動にカタルシス効果があるとするなら、感動体験が多いほどカタルシス効果の恩恵にあずかった経験も多いことになる。そして、そのような経験が多い者はストレスへの対処にカタルシス効果を利用するようになるのではないか。すなわち、感動体験が豊富なほどストレスの対処が上手だという予想である。この仮説の検証に加え、調査1と

調査2で達成・努力の感動が顕著だったことから、感動体験が多いほど達成への動機づけが高くなると考え、達成動機尺度も調査項目に含めることにした。

また、これまでの感動効果に関する研究では、感動体験を発達的な視点で分類する試みはなされていない。そこで本研究では、感動体験を幼児期から短大までの時期ごとに分類した調査2の結果を基に、感動体験の影響が体験した時期に依存するか検討する。

調査対象

新潟中央短期大学1、2年生148名が調査に参加した。調査は授業時間を利用して実施された。調査への参加は任意で、無記名で行われた。

アンケート内容

アンケートは感動体験尺度、ストレス対処尺度、達成動機尺度から構成された。感動体験尺度は、調査2の結果を基に作成された時期ごとの感動体験項目から成る。幼児期の感動体験は「遊戯会など発表会をやり遂げたとき」など5項目、小学生の感動体験は「離任式でお世話になった先生が離任した」など8項目、中学生の感動体験は「合唱コンクールなどをクラスが一体となって成功させた」など10項目、高校生の感動体験は「体育祭で」など9項目、短大生の感動体験は「実習最終日や実習中、子どもや先生から言われた言葉」など6項目であった。以上の感動体験項目について、どのくらい感動したか、「全く感動しない」から「とても感動した」までの5段階評定で回答を求めた。体験していないもの、おぼえていないものは「全く感動しない」に含めた。以上の評定得点を幼児期から短大までの5つの時期ごとに集計し、時期ごとの感動体験尺度得点を算出した。

ストレス対処尺度は神村・海老原・佐藤・戸ヶ崎・坂野(1995)により作成されたもので、本研究に関係のある下位尺度を3つ選んだ。下位尺度は、「悪い面ではなく良い面を見つけていく」など肯定的解釈3項目、「愚痴をこぼして気持ちをほらす」などカタルシス3項目、「スポーツや旅行を楽しむ」など気晴らし3項目であった。達成動機尺度は堀野(1987)により作成されたもので、本研究に関係のある下位尺度の自己充實的達成動機を採用した。達成動機尺度は「いつも何か目標を持っていたい」など13項目から構成された。いずれの尺度も「全くあてはまらない」から「とてもよくあてはまる」までの5段階評定で回答を求めた。

結果と考察

それぞれの時期の感動体験尺度得点とストレス対処尺度得点、達成動機尺度得点を相関分析すると(表2)、全ての時期の感動体験が現在のストレス対処(肯定的解釈・カタルシス・気晴らし)、達成動機と有意な相関関係にあった。ただし、感動体験は各時期同士でも高い相関関係にあるため($r=.32\sim.77$)、ストレス対処、達成動機との相関関係は擬似相関である可能性を含んでいる。次に、感動体験の影響力が体験した時期に依存するか比べるため、各時期の感動体験尺度得点を説明変数とし、ストレス対処尺度得点と達成動機

表2 感動体験とストレス対処・達成動機の相関行列

	感動体験の時期				
	幼児期	小学生	中学生	高校生	短大生
ストレス対処					
肯定的解釈	.19*	.27**	.27**	.39**	.40**
カタルシス	.21*	.29**	.37**	.35**	.29**
気晴らし	.26**	.33**	.47**	.41**	.45**
合計	.28**	.38**	.48**	.50**	.49**
達成動機	.24**	.39**	.45**	.49**	.55**

* p < .05, ** p < .01

表3 重回帰分析：時期ごとの感動体験がストレス対処と達成動機に及ぼす影響

	ストレス対処 (β)				達成動機 (β)
	肯定	カタルシス	気晴らし	合計	
幼児期	.01	.07	.06	.07	-.04
小学生	.07	.08	.09	.10	.16
高校生	.18	.21†	.11	.22*	.14
短大生	.24*	.04	.31**	.27**	.39**
R ²	.19**	.15**	.22**	.31**	.34**

†p < .10 *p < .05. **p < .01.

尺度得点を目的変数とする重回帰分析を行った。その結果、多重共線性の指標となるVIFは全て基準値の10以下となったものの、中学生の感動体験尺度得点はVIFが比較的高く(3.6~3.8)、相関係数と偏回帰係数が異符号になったことから、中学生の感動体験尺度得点を除去した上で再度重回帰分析を行った(表3)。

ストレス対処については、高校生以降、特に短大生になってからの感動体験が深く関わっていることが示された。達成動機においても同様に、短大生になってからの感動体験と関連が深いことが明らかとなった。当初予想していた幼少期の影響は本研究では確認されなかった。そもそも幼少期にはストレスを感じる体験や達成感を強く自覚する体験が希少だと考えられるので、ストレス対処と達成動機の代わりに、幼少期からの体験の積み重ねによって確立される性格特性について検討すれば、幼少期の感動の影響が見られるかもしれない。

次に、感動を体験した時期ではなく、感動体験の内容に関する影響力を分析するため、感動体験尺度38項目について因子分析(主因子法、エカマックス回転)を実施した。スクリープロットや因子の解釈可能性から4因子が妥当と判断し、いずれの因子にも高い負荷量を持たない項目(.40未満)や複数の因子で高い負荷量を示した項目を除去した。その上で

表4 感動体験の因子分析

時期	項目	因子1	因子2	因子3	因子4
因子1 小さいころの思い出					
幼	遊戯会など発表会をやり遂げたとき	.67	-.06	.07	.16
幼	遊園地に行った (ディズニーランドなど)	.65	.07	.15	.28
幼	初めて自転車にのることができた	.60	.09	.16	.02
幼	妹、弟、ペットの誕生	.59	.13	.03	.20
小	山登りをした	.56	.19	.24	.04
小	運動会や大会で	.55	.25	.25	.21
幼	卒園式	.55	-.06	.26	.27
小	遊園地に行った (ディズニーランドなど)	.52	.27	.36	.19
小	サンタさんから欲しかったプレゼントをもらった	.47	.27	.20	.14
因子2 芸術の感動					
中	映画、テレビを見て (中学校)	.05	.85	.14	.23
高	映画、テレビを見て (高校)	.06	.79	.24	.28
短	映画、テレビを見て (短大)	-.11	.67	.21	.27
小	映画、テレビを見て (小学校)	.36	.55	.07	.06
中	本を読んで	.15	.54	.19	.04
因子3 学校行事での感動					
高	体育祭で (高校)	.22	.11	.71	.15
高	修学旅行で (高校)	.27	.22	.61	.19
高	合唱コンクールなどをクラスが一体となって成功させた	.10	.21	.61	.20
中	体育祭で (中学校)	.11	.34	.61	.23
中	卒業式で (中学校)	.04	.14	.56	.36
中	修学旅行で (中学校)	.40	.25	.56	.06
因子4 予想外の嬉しかったこと					
中	部活の引退、最後の大会	.06	.19	.08	.75
中	部活で結果を出した	.23	.12	.05	.71
高	誕生日サプライズをされて	.17	.14	.30	.60
短	サプライズなど予想外のことが起こったとき	.06	.23	.32	.49
短	実習最終日や実習中、子どもや先生から言われた言葉	.08	.39	.37	.45
高	尊敬できる人に出会った	.24	.11	.19	.42

因子抽出法：主因子法 回転法：エカマックス法

表5 重回帰分析：異なる感動体験がストレス対処と達成動機に及ぼす影響

	ストレス対処 (β)				達成動機 (β)
	肯定	カタルシス	気晴らし	合計	
小さい頃の思い出	.09	.10	.08	.11	.11
芸術の感動	.09	.17*	.21**	.25**	.26**
学校行事での感動	.23**	.19*	.22**	.21**	.28**
予想外の嬉しかったこと	.28**	.29**	.42**	.44**	.29**
R^2	.17**	.18**	.31**	.36**	.28**

† $p < .10$ * $p < .05$. ** $p < .01$.

繰り返し因子分析を行った結果、最終的に29項目から4因子が抽出された(表4)。項目の共通性からそれぞれの因子を解釈し、「小さい頃の思い出」、「芸術の感動」「学校行事での感動」「予想外の嬉しかったこと」と命名した。

これら4因子を説明変数とし、ストレス対処尺度得点と達成動機尺度得点を目的変数とする重回帰分析を行った(表5)。肯定的解釈によるストレス対処には、学校行事での感動と予想外の嬉しかったことが強く影響していた。学校行事では、人との関わりの中で協力し、目標としてきたことを成し遂げると、大きな達成感を得ることができる。そのため、頑張って努力をすると大きな感動が得られるという前向きな気持ちを強めるのではないだろうか。また、予想外の嬉しい出来事も前向きで肯定的な気分にさせてくれると考えられる。その他のストレス対処については、小さい頃の思い出以外の因子が影響していた。特に予想外の嬉しかったことの影響が強く、予想外の喜びに感動を覚える経験を重ねると、ストレス状況に陥ったときに小さな喜びを見出すことでストレスの発散を図るようになるのかもしれない。

達成動機も同じく、小さい頃の思い出以外の因子から影響が認められた。先述したように、特に学校行事での感動体験では、皆で一丸となって取り組んで行事を成功させたという大きな達成感が得られる。この達成感が記憶として残ることで、達成したときの幸福感のためにまた努力しようという意欲につながるのではないだろうか。したがって学校行事での感動体験は、将来大きな感動を得るために今この時間は目標達成に向けて尽力しようという動機づけに繋がるのだと思われる。

まとめ

本研究では、青年期だけでなく幼児期の感動体験も現在の自分自身に何らかの影響があるのではないかと考え、感動という概念を構成する中身を調べた上で、感動体験とストレス対処・達成動機との関係性を検討した。まず感動の定義と構造についての調査結果は(調

査1)、感動が単一の感情値では表すことができないとする考え(戸梶, 2001)を支持し、複数の感情が関わっていることが見出された。報告された感動は、喜び、驚きなどのポジティブな感情を含むものだけでなく、別れなどの悲しみの感動もあった。ネガティブな感情を伴う感動については、今後の研究で取り組むべき興味深い課題である(戸梶, 2001)。負の感動には、悲しみだけでなく、どこか前向きになれる感情も含まれているのかもしれない。

時期ごとの感動体験に関する調査では(調査2)、多様な感動体験エピソードを集めることができた。特に達成の感動が多く報告されたことから、達成動機との関連性が強く示唆された。また、幼児期・児童期は喜びや驚きの感動が多かったのに対し、青年期は友達と何かをやり遂げたことなど人との関わりの中での感動が多かった。したがって、幼い頃は褒められて嬉しかった経験や初めての体験が感動体験として記憶に残るが、中学生以降になると、友達と同じ体験をして満たされた気持ちを共有したという感動へと感動体験の記憶は移り変わっていくのである。

ストレス対処・達成動機と感動体験の関係については(調査3)、当初予想した幼児期の感動体験の影響は見出されなかったが、最近経験した感動が深く関わる事が確認された。よって本研究においても、佐伯他(2006)や横山他(2011)の研究と同様に感動体験の効果を見出すことに成功したと言えるだろう。本研究により得られた知見は今後の感動研究に有用な指針を与えるものとなるはずである。感動に関する研究は未だ多いとは言えず、本研究を手がかりとして今後も感動に関する実証的研究が行われることを期待したい。

引用文献

- Frey, W. H., & Langseth, M. (1985). *Crying: The mystery of tears*. Minneapolis: Winston Press. (石井清子訳(1990)涙:人はなぜ泣くのか 日本教文社)
- 橋本巖・小倉丈佳(2002). 青年期における感動経験と共感性の関係 愛媛大学教育学部紀要, 第I部, 教育科学, 48, 57-73.
- 堀野緑(1987). 達成動機の構成因子の分析: 達成動機概念の再検討 教育心理学研究, 35, 148-154.
- 神村栄一・海老原由香・佐藤健二・戸ヶ崎泰子・坂野雄二(1995). 対処方略の三次元モデルの検討と新しい尺度(TAC-24)の作成 教育相談研究, 33, 41-47.
- 茂木健一郎(2009). 脳が変わる生き方 PHP研究所
- 佐伯怜香・新名康平・服部恭子・三浦佳世(2006). 児童期の感動体験が自己効力感・自己肯定意識に及ぼす影響 九州大学心理学研究, 7, 181-192.
- 戸梶重紀彦(2001). 「感動」喚起のメカニズムについて *Cognitive Studies*, 8, 360-368.
- 和田真江(2014). 感動体験がおよぼす大きな力 — 幼児期から短大までの感動について — 新潟中央短期大学平成25年度卒業論文
- 横山里沙・久保田瑞・古田真司(2011). 中学生における感動体験と自己肯定感の関連についての検討 — 学校適応と家族機能の影響に着目して — 東海学校保健研究, 35, 17-24.